

戦乱のなかで自らの命を生ききる無名の「士」の人生を描く長編小説

最新刊『士 SAMURAI』10月8日発売

混迷の世に人はいかに生きるべきか、戦国の物語に託して問う純文学

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役社長：松信 健太郎）は、10月8日に、当社出版物の最新刊として、『士 SAMURAI』を発売いたします。本書は、テレビ番組の歴史ナビゲーターとして活躍する作家・泉秀樹氏が、無名の下級武士を主人公に、不幸な生い立ちを背負いながらも、「巻き込まれる」ことで変転する運命に抗いながら、「自分が本当に求める生き方」を探し、葛藤する生涯を描いた長編小説です。混迷の世に人はいかに生きるべきか、著者メッセージとともに読みどころを紹介いたします。

- 書名：『士 SAMURAI』
- 著者：泉 秀樹
- 出版社：有隣堂
- 定価：税込2,200円（本体2,000円+税）
- 体裁：46判上製・本文336頁
- ISBN：978-4-89660-252-4
- 発売日：2024年10月8日（火）
- 取り扱い：有隣堂各店（一部店舗除く）、全国の書店

【目次】

- 第一章 本能寺
- 第二章 奥三河
- 第三章 安土
- 第四章 琵琶湖
- 第五章 京
- 第六章 甲斐
- 第七章 坂本
- 第八章 山崎
- 第九章 小栗栖
- 第十章 鴨川

●内容：

明智光秀の重臣・斎藤利三麾下の馬廻・苫野十蔵は、幼くして奥三河の寺に預けられるが、自らの出生の真実を知るや、父親を殺して逃亡する。安土城城主・織田信長への崇敬の念を高め、明智家への仕官が叶って、晴れて「士」になるが、「本能寺の変」では信長を攻撃し、「山崎の合戦」で明智勢が破れると真っ先に離脱する。父も母もない、主君もない、仏にもキリストの神にも心を動かさない十蔵には、いかなる境遇にあらうとおのれにこそすべての価値を置く独特の逞しい人生観・死生観があった。その結果、十蔵を待ち受ける運命とは……。戦国最大のクーデターに巻き込まれ、あがきながら自らの命を生ききろうとする「士」の人生を、臨場感あふれる文体でイメージ豊かに描く書き下ろし長編小説。



■ 著者メッセージ

人はみないずれ死ぬ。

とすれば、みずからの内面の渴望に忠実に生き切る者こそ本当の「士」ではないか。

鴨川の流れを見つめながら、回想される苫野十蔵の人生にはどんな意味があったのか。

「士」になったのは無意味だったのか。意味があったとすれば、どのようなものか。

それは同時に、読者自身の生き方を問う大きな問題なのだ。

■ 著者紹介

泉 秀樹 (いずみ ひでき)

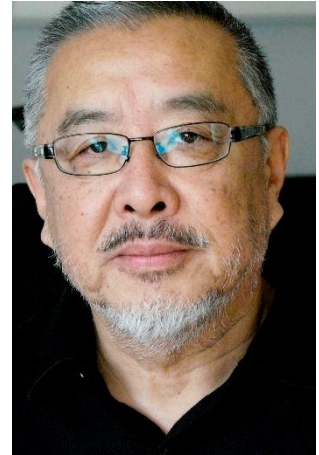
1943年、静岡県生まれ。慶應義塾大学文学部卒。

1973年、短編『剥製博物館』で第5回「新潮新人賞」受賞。

『土道の本懐』『歴史を歩く 深掘り神奈川』（以上 PHP 文庫）、

『一駅一話 江ノ電沿線 歴史さんぽ』『家康という生き方』（以上有隣堂）ほか、歴史に関する著書多数。

J: COM の視聴率トップの人気番組「泉秀樹の歴史を歩く」（全国配信）の原作とナビゲーターを担当している。



■ 本書のみどころ

・「戦争」「クーデター」……自分であるために、巻き込まれた運命といかに関るか

「自分の人生は自分のもの。好きに生きればよい」と人はいいます。しかし、コロナ禍、ロシア、イスラエルによる戦争など、否応なく「自由な生き方」を奪われてしまう事態が世界で頻繁に起こっています。日本でいえば、地震、台風などの災害もそうかもしれません。

本作の主人公である下級武士・苫野十蔵は、不幸な生い立ちを背負いながらも、「巻き込まれる」ことで変転する運命に抗いながら、「自分が本当に求める生き方」を探し、葛藤する生涯を歩みます。実の父親を殺し、石切り丁場で自分にリンチを加えた男たちを殺し、キリシタン大名・高山右近の知遇を得ても、キリストの教えを軽蔑して反発すら抱きます。右近の推薦を受けて晴れて明智光秀配下の「士」になっても、十蔵の醒めた心には君臣の情すら芽生えません。

そんな生き方の末に、彼を待っていた過酷な運命……。十蔵は、やがてみずからの人生を受け入れ、「士」とは？という問いを突き詰めていきます。

本作は、舞台は戦国時代ですが、無名の下級武士である主人公は、まさに混迷の現代に生きるわれわれ自身なのです。時代が大きく変化し、戦乱に満ちた激動の世を人はいかに生きるべきか。人生の本質とは何かを、戦国の物語に託して問う純文学作品です。

■ 有隣堂の出版物

<https://www.yurindo.co.jp/publication/>
